*Emily Brontë ;* Wuthering Heights 研究

# 「罪」の問題について

浜　田　公　一

*Wuthering Heights* (1847) はいろいろな見方が可能である．人間と自然との対応として，又「悪」の問題の面から，さらに人間の「愛」と「憎」の対応の面から，というように作品の解釈は多様性をきわめている．しかもどの面から論じたとしてもこの作品を包括的に論じつくすことは至難のことである．多面性と相矛盾する要素を同時にもっているのが特徴である．この小論においては以上のように多角的な作品の世界を作中人物たちのそれぞれが背負っている「罪」という面から考えてみたい．

*Wuthering Heights* はある意味において「罪人」の群像が描かれている，といえる．作品中のどの人物をとりあげても何らかの意味において「罪」を背負っていることは否定できない．かりに主人公の Heathcliff と女主人公の Catherine を別としても，Earnshaw 家の下男の Joseph, Earnshaw 家の当主 Hindley, Linton 家の当主 Edgar Linton, 又彼の妹の Isabella 等すべてその意識と行動の中には他人に有形，無形の危害を加えたり，自己の優越性を誇示したりする人間的欠陥をそなえている．

一般的に人間の「罪」ということを問題とする場合，大体三つの観点が可能である．

1) 法律的罪．これは社会の法律的規範に照して考えた場合の具体的な罪である．*Wuthering Heights* においてはこの種の社会的，法律的罪は皆無である．Heathcliff が Earnshaw 家，Linton 家を独領する過程にしても法律的には何ら罪はないのである．

2) 宗教的罪．これは人間がある一つの宗教的規範にしばられている場合（その宗教がいかなる宗派のものであっても），その宗教の一定の戒律から逸脱することである．*Wuthering Heights* は外見上宗教的色彩が濃厚である．作者 Emily Brontë が Methodist 派の牧師の家庭に育ったことにもよろうが，作中人物 Joseph, Edgar Linton 等はある意味では熱心な信仰者である．後述するように，彼等はそれぞれの立場において，自己の宗教的立場を主張し固守するが，注目すべきはこの作品において，むしろ宗教的立場（クリスチャンとしての）に忠実であろうとすること自体の中に作者は「罪」の傾向を見出だそうとしていることである．我々がはじめに明確にしておかなければならないことは *Wuthering Heights* においてはある特定の宗教的立場からみた人間に対する断罪の意図はなく，むしろ，従来の宗教（キリスト教）的立場からの判断，行動を逆に「罪」としてながめようとする作者の視点である．従来のキリスト教的立場への疑問，その結果として新しい「宗教」（又は morality）の確立，模索が Emily Brontë の立場であったといえる．以上のような理由から，当然，一定の既成の宗教的立場からの「罪」はこの作品には存在しない．

3) 道義的罪．これは法律又は宗教とは無関係の純粋に「人間的立場」から見た場合の罪である．いいかえると個々人の精神内にひそむ人間本来の魂の中にみられる罪である．

*Wuthering Heights* の作者 Emily Brontë は法律的罪，宗教的罪を問題としているのでなく，この人間の魂の中に先天的にかくされている罪への傾向を問題としているのである．

この視点からみると，たとえば Joseph のような熱心なクリスチャンでも宗教的エゴイストという罪を背負わざるをえないのである．

以下において前述の数人の人物の罪を考え，さらに Heathcliff と Catherine は，この道義的罪の視点から見るといかなる解釈が下され，結果的に Emily Brontë は人間を罪から救うことが可能と見ていたか，どう

かの問題を考えてみたいのである.

Emily Brontë は従来のキリスト教に多分に疑いを持っていたことは明らかである. 宗教が, さらに宗教的戒律がある極端な形をとって人間世界を威圧するようになる時には, そのこと自体が一つの罪の形態をとってくることを作者は Earnshw 家の下男 Joseph によって描いている.

> '"The master only just buried, and Sabbath is not over, and the sound of the gospel still in your ears, and you dare be playing! Shame on you! sit you down, bad children! there's good books enough if you'll read them: sit you down, and think of your souls!"
>
> 'Saying this, he compelled us so to square our positions that we might receive from the far-off fire a dull ray to show us the text of the lumber thrust upon us. I could not bear the employment. I took my dingy volume by the scroop, and hurled it into the dog kennel, vowing I hated a good book. Heathclff kicked his to the same place. Then there was a hubbub![1]'

(Joseph の言葉は標準語になおして引用した[2])

これは幼年時代の Catherine と Heathcliff が Joseph の威圧的な宗教的躾に反抗する場面である. 文中の 'good book' は Bible を指しているが, ここには宗教の威力をかりた Joseph の威圧者としての姿が描かれている.

Joseph は上のように Catherine や Heathcliff に対してキリスト教を強要する宗教的エゴイストの立場をとっているが, 同じく熱心なクリスチャンの Edgar Linton は多少趣を異にしている. Joseph の場合は彼独特の

方言，彼の宗教的圧制者としての専横な言動により一見して一つの宗教的ドグマにおちいった人間のもつ無意識的な「罪」を我々は感得できる．しかし Edgar Linton の場合はクリスチャンであることが人間の本来の愛情（妻の Catherine に対する）をきわめて形式的な冷淡なものにしてしまっている．たとえば彼は Catherine が重病で寝ていても自分の書斎から出てこようとしない．Catherine はそういう Linton の冷淡さに立腹し，'I'm past wanting you. Return to your books.'[3] といっている．

Edgar Linton がキリスト教的 morality の故におちいっている最大の罪は自分の Catherine に対する前述したような冷淡さにもかかわらず，Heathcliff に対しては，Heathcliff が彼女に対してもっている愛情を憎む，というエゴイズムである．彼は Catherine に対して，

> 'It is impossible for you to be *my* friend and *his* at the same time; and I absolutely *require* to know which you choose.'[4]

といつて自分と Heathcliff のいづれを選ぶか，とせまっている．これは Edgar Linton が夫婦の間の真の愛情の有無よりも，外形的 morality としての夫と妻という倫理的立場から Catherine を非難するエゴイステックな考え方である．

Emily Brontë が Edgar Linton と Catherine の夫婦関係によって語っていることは，クリスチャンの Edgar Linton の単なる宗教的形式主義，愛情がなくても夫婦という社会習慣的関係を維持することの偽善性の問題である．たとえば Edgar Linton は自分の妻に接近しようとする Heathcliff に対して，一般的な嫉妬心の代りに宗教的，倫理的 morality をあてはめようとしている．

> 'Your presence is a moral poison that would contaminate the most virtuous: for that cause, and to prevent worse consequences, I shall deny you hereafter admission into this house, and give

notice now that I require your instant departure.'[5]

本来は人間の魂の救済であり，人間の浄化を目的としているキリスト教が Edgar Linton においては人間の本質的な愛情を抹殺し，外面的倫理観のみで判断するようになることが，Emily Brontë からみた従来の宗教（キリスト教）のもたらす弊害であり人間のおちいる罪の形態の一つであったのである．

*Wuthering Heights* においては従来のキリスト教が疑問視されている，ということをのべたがこのことは Emily Brontë が宗教そのものを全面的に否定している，ということを意味するのではない．後述するように Heathcliff と Catherine がお互に相手を「神」と代替しうる存在として考えたことは，キリスト教的な「神」の代りとして新しい「神」の理念への模索，探求として見られるべきである．Emily Brontë のもとめた「神」は形式的，習慣的礼賛の対称にあるのでなく愛情と憎しみの感情をこめた人間と人間との関係の中に存在していたのである．彼女は無神論者ないしは懐疑主義者ではないのである．

以上のべてきたのは Joseph と Edgar Linton にみられる従来のキリスト教がもたらす罪の輪郭である．前に「宗教的罪」ということをのべたが，Emily Brontë においては宗教的立場から人間を弾劾するのでなく，逆に宗教的立場そのものを批判している所に人間のもっともおちいりやすい罪の形態を観察しているということが言えるのである．

Heathcliff と Catherine の問題にはいる前に *Wuthering Heigths* における今一つの罪の形態を考えたい．

Hindley はある意味においてこの作品では特殊な存在である．*Wuthering Heights* におけるほとんどすべての人物は多少とも自分の morality をもち，それを固守するといった頑固さと一貫性がある．Joseph は宗教的優越感，Edgar Linton は宗教的倫理感，Heathcliff と Catherine は自

己の信じる新しい「神」への誠実さ，というようにすべて自分の立場を主張している．

しかし，Earsnhaw 家の当主 Hindley は一種の性格破綻者である．彼は上述のような理念をもっていない．彼は Heathcliff と Catherine の幼年時代には彼らに対して，'the tyrant'[6] であった．長じて Heathcliff が Wuthering Heights にふたたび出現した時に Heathcliff の策略にかかり，日夜賭博にふけり家や土地を抵当にして最後にはすべてを失う経過をたどっている．彼は無一物になった時に酒によって現実から逃避しようとする．

> 'Now, don't you think the lad would be handsomer cropped? It makes a dog fiercer, and I love something fierce—get me a scissors—something fierce and trim! Besides, it's infernal affectation—devilish conceit it is, to cherish our ears—we're asses enough without them.'[7]

これは Hindley が自分の子供 Hareton の耳を切ったら少しは見やすくなるだろう，といって我が子をおどす所である．酒に酔った上での言葉ではあるが，この中には残忍さと人間に対する憎しみと絶望がかたられている．とくに，「耳なんかを大事そうにおいとくのは，とんでもない気どり——とてつもないうぬぼれだ——耳なんかなくとも人間はもともとばかなんだ」[8]という所に自棄的な人間に対する嘲笑がみられる．この Hindley には Joseph とか Edgar Linton にみられる自分の立場の固守からくる偏見の罪でなく，自分の Heathcliff に対する敗北，そのための劣等感と自嘲的反抗といった人間の弱さのもっている罪が描かれている．ほとんどの人物たちが自己主張をしている中にあって，唯一人自滅的な絶望感のために苦しんでいる Hindley にも矢張り一つの罪の形態がみられるのである．

*Wuthering Heights* における Heathcliff と Catherine の関係は単なる男性と女性の関係ではない．通常の恋愛関係でなく，作者の Emily Brontë が前述したような Joseph, Edgar Linton にみられる従来のキリスト教（すなわち人間の思想を形成する根幹としての宗教）がもたらす弊害に対して，新らしくそれと対立するような morality の一つの形態として男性が女性を，女性が男性を本能的に求める姿の中に「神」又は「宇宙の真理」といった理念を探求しようとした実験と言えるのである．

Catherine はたとえば彼女にとっての Heathcliff の存在の意味を

> 'If all else perished, and *he* remained, *I* should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger: I should not seem a part of it.'[9]

と言っている．ここに見られる思想は見方を変えると熱心なクリスチャンが「神」への信仰を告白しているのと類似しているのである．彼女にとっては Heathcliff の存在は 'the universe' にひとしい．彼が生存していれば自分も生存しているし，彼が死滅すれば自分も同時に存在しなくなるのである．このような関係は現実の人間と人間との関係の間では成立しない．Emily Brontë の新しい morality というのは現実に生きている人間を「神」又は「永遠」の理念にまで高めようとする努力であった．Catherine のそのような Heathcliff に対する「神」の理念に近い永遠性の象徴としての礼賛の態度はたとえば

> 'My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being.'[10]

という言葉に表現されている.

Heathcliff からの Catherine の見方も同様に彼女の中に「永遠の真実」を求めようとする態度がみられる. ただ彼の場合, Catherine という女性は彼にとっての 'soul' であり 'life' であると同時に, 具体的に肉体をそなえた対称でもありえたのである.

'I *cannot* live without my life! I *cannot* live without my soul!'[11]

Heathcliff は上のように Catherine に対して精神的な見方をしていると同時に彼女を具体的対称として彼女の肉体の存在の確認, その確保, という一見「神」の理念とは矛盾するかのような欲求を示している.

> He flung himself into the nearest seat, and on my approaching hurriedly to ascertain if she had fainted, he gnashed at me, and foamed like a mad dog, and gathered her to him with greedy jealousy. I did not feel as if I were in the company of a creature of my own species.[12]

これは病気の Catherine の死をおそれた Heathcliff が彼女を失うまいとして示す動物的本能である. Heathcliff にあっては Catherine は自分の 'soul' であると同時に肉体的存在でもあったのである.

批評家によっては Heathcliff と Catherine の関係を外見的には形而上的または宗教的理念の象徴であるけれども, その根底においては 'sexual' な関係である, といっている人もある.[13] これは, おそらく上に引用したような Heathcliff が Catherine にしめす動物本能的行為から暗示されてのことであろうが, Emily Brontë においては, この動物的本能と前述のあたらしい「神」を探求する理念とは矛盾していないのである.

Heathcliff にとって Catherine は 'soul' でありえたと同時に具体的に手中に抱くことのできる目的物でもあった. つまり Emily Brontë の求め

ている「神」というのは従来のキリスト教の神のように高い場所に抽象的に位置するのでなく，現実的，具体的であり（これは卑俗な存在という意味ではない），しかも自己の精神的憧憬の対称になりうるような「神」でなければならなかったのである．

以上のように Heathcliff の（すなわち Emily Brontë の）求めようとする「神」の理念が象徴的であると同時に具象的でもなければならなかった所に彼の（Emily Brontë の）従来のキリスト教に対する批判的立場の出発点があり，又作者の求める「神」の意味の特殊性がうかがえるのである．

Heathcliff の Catherine が死んだ時の異常な絶望感と，自分を残していなくなった彼女への憎しみの感情はこのように彼のもっていた Catherine に対する精神的憧憬の対称としてと同時に，具体的人間としての Catherine への欲望（必ずしも‘sexual’とはいいきれない）を考え合せてみると理解できるのである．

> ‘Where is she? Not *there*—not in heaven—not perished—where?... I pray one prayer—I repeat it till my tongue stiffens—Catherine Earnshaw, may you not rest as long as I am living! ...Be with me always—take any form—drive me mad! only *do* not leave me in this abyss, where I cannot find you!...’[14]

Catherine の死の直後 Heathcliff はこのようにいって彼女の死をなげくが，ここにみられるのは彼女の死をなんとかして拒否しようとする努力である．‘not in heaven—not perished’という所にキリスト教的意味での死によって天国にゆける，という考え方を否定しようとする意志がのべられている．Catherine は死んではいないと信じこもうとする Heathcliff の態度の中には前述したような具体的肉体を備えた対称を喪失したことへの呪詛の心理と従来のキリスト教的立場からの，死を現世からの解放であり

天国への階段である，という教義への挑戦の心理が見うけられるのである．

前述したように *Wuthering Heights* におけるすべての人物は何らかの形において罪を背負っている．Joseph, Edgar Linton 又は Hindley 等はそれぞれ若干意味は異なるけれども物語に登場する瞬間から「罪人」として描かれている．そして，その理由は根本的には Emily Brontë の新しい morality 又は「神」の探究の立場から，彼らは当然「罪人」でなければならなかったからである．

Heathcliff と Catherine のこの作品での特殊性を作中人物の「罪」という立場からながめてみると，二人とも前述したように従来のキリスト教による morality, 倫理感に対する反逆をこころみている．従来のキリスト教がかもし出している「罪」からの離脱をこころみている．しかしながら彼等二人も同時に別な意味において「罪」を背負う運命におかれているのである．前に人間の犯しうる三つのタイプの罪をあげておいたが，Joseph, Edgar Linton, Hindley, 等の罪はすべて広い意味において道義的罪を犯している，といえる．しかし今から考えようとする Catherine のこの作品においてとった行動が人間の道義的な罪の典型といわなければならない．

*Wuthering Heights* における Catherine の行動ははじめから矛盾を含んでいた．前述したように彼女にとって Heathcliff は自分の‘the universe’であり，‘the eternal rocks beneath’でもあった．しかしながらこのように精神的な対称である Heathcliff とは別に彼女は Edgar Linton に対しても Heathcliff に対するのとは異質の関心を示している．たとえばEdgar Linton と結婚する理由として，

‘He will be rich, and I shall like to be the greatest woman of the neighbourhood.’[15]

といっている．Catherine の矛盾した個性は自分と Heathcliff との関係を明瞭に意識していたのと同様に Edgar Linton との関係を物質的富の面からわり切っていた．彼女における矛盾というのは精神性と物質性とを同時に所有しうるということである．彼女は又 Edgar Linton のことを 'I shall be proud of having such a husband.'[16] ともいっているのである．

Catherine と Heathcliff は外面上，前述したようにお互に相手を「絶対性」の象徴としてあがめ，その立場から従来の morality への挑戦をこころみてはいるが，ある点において根本的に異質の人物である．それは Catherine は *Wuthering Heights* においては先天的に Earnshaw 家（つまり従来のキリスト教的 morality の世界）にしばられている人間である，という点である．したがって彼女の体の中には前述の Edgar Linton に示したような物質的富への関心（既成の社会道徳への関心）が本質的にあったといってよい．いいかえると，彼女は Wuthering Heights の Earnshaw 家という旧家に生れることによって，すでにしばられていたのである．

したがって Catherine が Heathcliff を自分の 'the universe' とか，'the eternal rocks beneath' と見なすことは自分自身を既成の社会の morality から解放したい，という念願に外ならなかったのである．この点は後にのべる Heathcliff が Wuthering Heights においては一箇の outcast であり，どこにも帰属性をもっていなかったのとは根本的に異なっている点といえる．

Catherine の体の中に存在しえた精神性と物質性の二元的世界は，彼女と Wuthering Heights との結びつきを考えれば当然といわなければならない．

> '*Here!* and *here!*' replied Catherine, striking one hand on her forehead, and the other on her breast: 'in whichever place the soul lives. In my soul and in my heart, I'm convinced I'm

wrong![17]'

これは Catherine が Edgar Linton からの結婚の申し込みをうけいれた時の自分自身の不安な気持を告白している所である．彼女は又別な所で 'I want to cheat my uncomfortable conscience.'[18] ともいっている．

Catherine がこのような意識と行動において犯している罪は自分の中の精神的真実（すなわち，Heathcliff に対する絶対的な結びつき）に目をそむけて Edgar Linton と結婚したことである．人間の犯す道義的罪というのは，このように法律的罪とか宗教的罪と異って自分で自分の精神的真実をいつわる，ということを意味するのである．

以上のように考えると *Wuthering Heights* における Catherine の立場と，彼女の犯した罪は Joseph とか Edgar Linton とは異なり，さらに後にのべる Heathcliff の立場とも異なっていることに気づくのである．Catherine は Joseph や Edgar Linton のように自分の罪に無意識ではない．むしろ，自分が Heathcliff をいつわっていることはよく知っている．又，彼女が Edgar Linton と結婚することは本質的に自分が嫌悪している今一つの別な罪（Edgar Linton のもっている従来のキリスト教から生れた罪）に加担することになる，ということを彼女は充分知っていたのである．いってみれば *Wuthering Heights* における Catherine の意識と行動は最後まで二重の罪の意識を彼女に背負わせる結果になったのである．

> 'I wish I were out of doors! I wish I were a girl again, half savage and hardy, and free;. . . I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills. Open the window again wide: fasten it open!:..'[19]

これは Catherine が Linton 家で重病にかかり，ふたたび Heathcliff との精神的真実の世界にもどれないことを知って，少しでも自分の憧憬している世界へ接近したい念願をかたる所である．この中には，自分が

Heathcliff に対して犯した道義的な罪への贖罪意識が明らかにみとめられるのである.

*Wuthering Heights* において作中人物のそれぞれが背負っている罪の問題を考える時に明確にしておかなければならないことは作品中に描かれる一つ一つの罪の根源が何によって発生しているか，ということである. 前述の Catherine の場合，従来のキリスト教的 morality への反抗という動機（それ自体は正しい）から自分の精神的真実を裏切る，という罪を犯しているのである. Emily Brontë は Catherine と Heathcliff について，他の人物と取扱いが異なるのは以上のように根本的には作者の新しい morality への探究のための人物として描きながらも，彼等二人も又，結果的には罪を犯さざるを得なかった，という「罪に挑戦するために罪をもってした」という正反対の役割を示していることである. このように一人の人物の罪への反抗と，その結果としての罪，という二重の意味は Heathcliff においてもっとも顕著である.

Heathcliff と Catherine は前にもふれたように，ともに Edgar Linton 的な従来のキリスト教の倫理観を基本とした世界に反抗するが，二つの点において彼らの反抗の仕方は異っている.

一つは前述したように Catherine の場合には彼女自体が本来 Wuthering Heights の住人であり，そのために彼女の反抗は多分に自分自身を解放する，という意味を含んでいたが，Heathcliff の場合には彼は Wuthering Heights とは関係のない異邦人的存在であり，そのために Earnshaw 家，Linton 家によって形成される Wuthering Heights に対する反感と嫌悪は徹底した敵意となっている. 彼は元来 Mr. Earnshaw によって拾われた孤児であり，その出生について，'It's as dark almost as if it came from the devil.'[20] といわれている.

今一つの点は Catherine はつねに Edgar Linton に反抗しながらも自分の心の中の罪の意識（Heathcliff に対する）に悩まされるが，Heathcliff にはこの罪の意識は存在しない．これは彼が Wuthering Heights と関係のない異邦人であったことも関係するが，いづれにしても，彼の場合には，徹底した Wuthering Heights の住人たちに対する敵意と，その敵意において少しも良心的苦痛をもたなかったのが特徴である．以下はその憎しみの表現である．

> 'I have no pity! I have no pity! The more the worms writhe, the more I yearn to crush out their entrails! It is a moral teething; and I grind with greater energy, in proportion to the increase of pain.'[21]

Heathcliff を *Wuthering Heights* に描かれているあらゆる他の罪人たちと区別している最も重要な点は，前述したような「罪に対抗するために罪をもってする」という一人物の中にみられる相反する二つの目的と意味に外ならない．

前述したように Heathcliff の Catherine を愛する心理は単なる恋愛でなく，Catherine が彼に対してもっていたと同じような精神的真実の世界への礼賛という動機である．つまり彼においても罪の動機は新しい morality の探究に外ならなかった．しかしながら *Wuthering Heights* においての Heathcliff の意識と行動はもっぱら残忍な「復讐」という一点に集中するのである．

> 'I'm trying to settle how I shall pay Hindley back. I don't care how long I wait, if I can only do it at last. I hope he will not die before I do!'...'No, God won't have the satisfaction that I shall,' he returned. 'I only wish I knew the best way! Let

me alone, and I'll plan it out: while I'm thinking of that I don't feel pain.[22]'

少年時代に虐待された腹いせのために，Hindley に対して彼はこのように恨みをもっている．そしてその結果として，彼は Hindley から賭博によって家，屋敷を奪う目的を果している．

'It's odd what a savage feeling I have to anything that seems afraid of me! Had I been born where laws are less strict and tastes less dainty, I should treat myself to a slow vivisection of those two, as an evening's amusement.[23]'

これは Edgar Linton の娘 Cathy を我が家にとじこめ，自分の息子と無理に結婚させようと企んでいる時の彼のことばである．Heathcliff が少年時代にうけた虐待の復讐として Hindley から家，屋敷をうばったこと，あるいは Catherine と結婚した Edgar Linton の娘に復讐し，さらに Edgar Linton の家，屋敷も我が物としたこと，それら一つ一つの行動は罪とはいい切れない．単なる計画の周到な悪事にとどまっている．しかし注目すべきは，Heathcliff はこれらの復讐の行為の過程において Edgar Linton や Hindley だけを憎むのでなく，人間そのものを全体的に敵視している，ということである．彼が Edgar Linton や Hindley に対してのべる恨みの言葉，たとえば，引用 No, 21 における，'The more the worms writhe, the more I yearn to crush out their entrails!' とか，さらに引用 No, 23 における 'I should treat myself to a slow vivisection of those two....' という言葉はいづれも人間全体に対する嗜虐的な復讐のことばとしかうけとれないのである．

ここで言いうることは，Heathcliff は根本的には Hindley とか Edgar Linton の住んでいる固定した習慣，倫理観念に支えられている世界に対する反抗をこころみながらも，結果的には人間全体をにくみ，その根絶を

のぞむ，というまったく別種の罪を犯している，ということである．前述したように Edgar Linton や Hindley はそれぞれにおいて罪人である．しかしながら，それへの反抗として自己の個人的復讐の心理を拡大して人間そのものへの反逆を意図することによって，Heathcliff 自身もまた罪の方向へ接近している，ということが言えるのである．

Emily Brontë が *Wuthering Heights* において提示している Heathcliff の意識と行動は根本的には以上のように二元的なものである．Heathcliff を描いている作者の立場はその根底においては罪に対する復讐，そのための罪という相反した方向をもつものである．

まえにふれたように *Wuthering Heights* における Heathcliff と Catherine の関係は一面からみるとおたがいの愛情と憎しみの関係でもある．これはとくに Heathcliff から Catherine をみた場合，自分をのこして死んだ彼女に対しては，彼は愛惜よりも憎悪の感情を示している．

> 'May she wake in torment!... You said I killed you—haunt me, then! The murdered *do* haunt their murderers, I believe. I know that ghosts *have* wandered on earth....'
>
> He dashed his head against the knotted trunk; and, lifting up his eyes, howled, not like a man, but like a savage beast getting goaded to death with knives and spears.[24]

これは Catherine の死に対して怒りを爆発させる Heathcliff の言葉と態度である．その根底は等しく新しい morality への追究をしていた Catherine への深い愛情があるとしても，反面では彼女の背信行為と死をにくんでいることは明らかである．Heathcliff からみて Catherine への愛情はいつも憎しみととなりあっていた．

この「愛」と「憎」の二つの感情の二元性は *Wuthering Heights* を支える中心的問題となっている．作者 Emily Brontë からみて Heathcliff

というこの作品の主人公は一面では作者のあたらしい morality 探究のための代弁者である点において作者の分身といえる．しかし，彼が犯す人間呪咀という罪の面からみると彼は Joseph, Edgar Linton より重大な罪人である．Emily Brontë 自身が主人公 Heathcliff に対して一種の「愛」と「憎」の二元的立場（ambivalence）をとらざるをえなかったのである．

*Wuthering Heights* はある意味において非常に倫理性の濃厚な作品である．という意味は前章においてのべたように Emily Brontë は一方において Heathcliff に託することによって Edgar Linton に象徴される従来のキリスト教にみられる罪を清算する試みをしながらも，反面ではHeathcliff がそういう試みの過程で犯す人間を呪咀するという罪に対しても同時に峻厳であったからである．Emily Brontë の Heathcliff に対してもっていた ambivalence は作者が Heathcliff 自身の罪の清算をする，という倫理的立場から発生している．

Heathcliff は前述したように Edgar Linton, Hindley をにくむことから人間全体を敵とするようになるが，その晩年においては自ら絶食して死期を早める行為に出ている．この行為は一方では死んだ Catherine との精神的合一という目的のためであったが，実際の彼の行為そのものは肉体的苦痛をともなう一種の「苦業」のような外観を呈している．

> 'With my hard constitution and temperate mode of living, and unperilous occupations, I ought to, and probably *shall*, remain above ground till there is scarcely a black hair on my head. And yet I cannot continue in this condition! I have to remind myself to breathe—almost to remind my heart to beat! And it is like bending back a stiff spring;...'[25]

これは死に近ずきつつ Heathcliff が訴える苦痛である．彼はいっている，「心臓の鼓動さえもほとんど思い出しながらやっているようなものだ！まるで，強いバネを逆に曲げているようなものだ.[26]」

このような Heathcliff の肉体的苦痛も彼の精神的自由の世界を探究するためには止むをえない過程ではあるが，それ以上に作者がこの主人公に課している罪に対する罰とみなしうるのである．Emily Brontë はこの作品のどの人物に対するよりも，Heathcliff の人間呪咀という罪と，それに対応する形での彼の晩年の苦しみの観察を忠実におこなっている．

> 'I have a single wish, and my whole being and faculties are yearning to attain it. They have yearned towards it so long, and so unwaveringly, that I'm convinced it *will* be reached—and *soon*—because it has devoured my existence: I am swallowed up in the anticipation of its fulfilment.[27]'

この Heathcliff の言葉も自分の精神的真実への追求の努力と，それにともなう彼の経験する苦痛の告白とみてよいのである．

Emily Brontë が Heathcliff に対して以上のように峻厳であることは作者自身の立場の倫理性を示しているのである．いいかえると，作者は Heathcliff への共感（自分の理想とする morality の実践者としての）とは別に，彼の犯した罪に対して寛大ではなかったのである．

*Wuthering Heights* がしばしば 'tragic'[28] であるといわれたり，その最終的結末が 'ambiguous'[29] であるといわれるのは以上においてのべたような Emily Brontë の Heathcliff に対してもっていた「罪に対する清算」の要求からおこることなのである．作者はこの主人公への共感以上に彼の行動についての責任をおっていたわけである．そのために Heathcliff と Catherine が現実において結婚する，というような happy ending は生れてこないのである．

Mr. Heathcliff was there—laid on his back. His eyes met mine so keen and fierce, I started; and then he seemed to smile. I could not think him dead: but his face and throat were washed with rain; the bedclothes dripped, and he was perfectly still. The lattice, flapping to and fro, had grazed one hand that rested on the sill; no blood trickled from the broken skin, and when I put my fingers to it, I could doubt no more: he was dead and stark![30]

これは Heathcliff の死の状況である．この死の状況の中に Emily Brontë が彼に対してもっていた「愛」と「憎」という二面的な関心が象徴化されている．文章の前半の部分，「その目があまりに鋭くすさまじくこちらの目に合ったので，わたしはどきっとしました．それからあのひとがにっこり笑ったような気がしました」[31]という所に Heathcliff が生前に欲求した精神的真実の世界へ「死」によって到着しているのであろう，という推察がなされる．しかし反面，文章の後半に描かれる雨の中で洗われている彼の死体の描写はグロテスクである．

すでに推察できるように Emily Brontë は Heathcliff の罪の清算を彼の肉体の面に要求している．彼のグロテスクな死体は彼の罪の象徴として雨の中にみにくい姿をさらしていると考えることができる．このように Emily Brontë は Heathcliff の死の状況の中に彼に対する「愛」と「憎」の二面的関心を示しているのである．

今までにのべてきた所によって Emily Brontë が *Wuthering Heights* において示している「罪」の概念と彼女のその罪に対する態度を考察してきた．ここで考えなければならないことは彼女の念願していた新しい

morality とはいかなる概念を指すかということである.

Catherine や Heathcliff がそれぞれ相手を宇宙とか魂とかよんでいる所から，従来の神にかえて現実の人間の中に「神」を求める態度が第一にあげられる．その神は人間の肉体を具え具体的に目に見える存在である.

つぎにその神は属性として狂暴な破壊的力を有していること．*Wuthering Heights* における Heathcliff は自分が Catherine という「神」を憧憬しながらも同時に彼自身も絶対的存在として彼女から憧憬された神にひとしかった.

第三にこの神に対面するためには従来のキリスト教におけるように祈るだけでは充分でない．自からの肉体をしいたげることによって肉体の壁をやぶらなければならない.

第四にそういう神を欲求することは人間の世界で新たな罪を犯すことになる．その罪を清算することが，神への対面を可能にする.

Emily Brontë の念願していた世界は以上のように考えてみると，かならずしも宗教的理念とは矛盾しない．ただ従来のキリスト教にくらべると人間的，破壊的で烈しいものである．*Wuthering Heights* は無神論者の手になったものでなく，むしろ潔癖な信仰者の新しい「神」の理念の模索であった，といいうるのである.

**註**

1. Emily Brontë, *Wuthering Heights* (New York: Everyman's Library, 1966), p. 17.
2. この標準語訳は *Wuthering Heights*, Vol. I (Tokyo: Kenkyusha, 1961), Notes, p. 15. によった.
3. Emily Brontë, p. 109.
4. *Ibid.*, p. 101.
5. *Ibid.*, p. 97.
6. *Ibid.*, p. 16.
7. *Ibid.*, p. 62.

8. エミリ・ブロンテ「嵐が丘」(三宅幾太郎訳：東京：河出書房，世界文学全集8, 昭和35年) 89頁.
9. Emily Brontë, p. 69.
10. *Ibid.*, p. 69.
11. *Ibid.*, p. 143.
12. *Ibid,*, pp. 137–138.
13. Richard Chase, "The Brontës", *The Kenyon Review* (Autumn, 1947) p. 496.
14. Emily Brontë, p. 143.
15. *Ibid.*, p. 65.
16. *Ibid.*, p. 65.
17. *Ibid.*, p. 66.
18. *Ibid.*, p. 68.
19. *Ibid.*, p. 107.
20. *Ibid.*, p. 30.
21. *Ibid.*, p. 130.
22. *Ibid.*, pp. 50–51.
23. *Ibid.*, pp. 230–231.
24. *Ibid.*, p. 143.
25. *Ibid.*, p. 278.
26. エミリ・ブロンテ「嵐が丘」405頁.
27. Emily Brontë, p. 278.
28. A. C. Swinburne, *Miscellanies* (London: Chatto & Windus, 1911), p. 261.
29. Inga-Stina Ewank, *Their Proper Sphere* (London: Edward Arnold, 1966), p. 111.
30. Emily Brontë, p. 287.
31. エミリ・ブロンテ「嵐が丘」417頁—418頁.